



Title	懷徳堂の和学書目並解説
Author(s)	八木, 毅
Citation	語文. 1954, 10, p. 40-45
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68440
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懷徳堂の和学書目並解説

八 木 穀

一 三宅萬年

名は正名、字は実父、石庵又は萬年と号す。寛文五年正月十九日京都三条に生る。享保十五年七月十六日歿、寿六十六、河内神光寺に葬る。

1 萬年先生遺墨帖 一帖（懷徳堂文庫蔵）

遺墨断簡集であるが、中に、和歌や俳句も含まれてゐる。

二 中井翫庵

名は誠之、字は叔貴、翫庵と号す。元禄六年九月廿九日播州龍野に生る。宝暦八年六月十七日歿。寿六十六、八丁目寺町誓願寺に葬る。

2 とはすかたり 一卷 半紙判刊本

3 和歌和文集 未刊

4 春のことば 一卷 未刊

5 新題和歌 未刊

三 五井蘭洲

名は純禎、字は子祥、通称藤九郎、蘭洲・冽庵・梅塙と号す。元禄十年大阪に生る。宝暦十二年三月十七日歿。寿六十六、八丁目寺町実相寺に葬る。

6 勢語通

四册（内卷二、外卷二）美濃紙袋綴
宝暦元年十二月成

自筆本（懷徳堂文庫蔵）

丸山盛紀筆本（吉永 登氏蔵）四册

活字本二册 明治四十四年刊（懷徳堂紀念会刊行）

本書の詳細については本文「勢語通について」を参照のこと。

7 源語提要 三册 半紙判写本（吉永登氏蔵）

第一册 源氏物語をよむ凡例及本文桐壺よりよもぎ生まで

第二册 せきやよりかしはぎまで

第三册 よこぶえよりゆめのうきはしまで

巻の解題と本文の抜粋、註を本文の行間に書きこむ。凡例に、著者の源氏物語観を述ぶ。

8 源語話 三册 半紙判写本（吉永登氏蔵）

部門別いろは順に源氏物語の語彙解説

第一册 天文・地理・時候・居所・宮室・鬼神・虚詞

第二册 人倫・支体・草木・禽獸・蟲魚・服食器財

第三册 人事部

源語詠を源語梯と改題して安永十年近江大上川のほとりなかつかさの序文を附し出版せるものあり。のち、天明乙巳歳夏、中井竹山の源語梯弁を附して再板。

78については本文「源語提要・源語詠について」を参照

9万葉詠 三冊 半紙袋綴写本（吉永登氏蔵）

萬葉集中の語句を卷一天文時候・卷二鬼神人倫支体・卷三態芸事為・卷四虚詞助辞にわかし、各巻いろは順に配列して略解したもの。

写本には他に四冊本五冊本がある。それらには巻首に寛政九年十月高津中川昌房の序（純韻の歌並びに此書のことを述べてある）と巻末に萬葉集凡例のあるものもある。

10新題和歌百首 一冊 半紙袋綴写本

五井蘭洲の百首の題詠歌に倣って川井立牧・加藤竹里も同じやうに題詠した和歌の集。月中漁艇 散楽 戲坊 機関 医煙草 乞食 盜 老妓 西施 読史 日本武尊等の新題一題一首である。

機関

みるがうちに人も草木も波のうへに掉ささぬ舟の行まかふ也

老妓

もとゆひのみたれて霜とふるされし昔をいまは忍ぶもぢずり

蘭洲の作例を挙げれば右の如くである。

桂山（川井立牧、名は雍）の百首の終りに

右倣五井蘭洲新題百首 宝曆四年甲戌二月 桂山

とあり。桂山は詩を梁田蛻巖に、歌を長伯に学ぶ。明和三年七月二十日歿、寿五十九。医を業とし、懷徳堂のあった尼崎町の町年寄であった。その家集を桂山集といふ。

11蘭洲茗話 上下二巻 一冊（刊本）

明治四十四年十月懷徳堂記念会より出版、発行所大阪心斎筋松村文海堂、蘭洲の隨筆である。蘭洲研究には一見すべき書である。

12古今通 二十巻 八冊 蘭洲自筆稿本（懷徳堂文庫蔵）

古今和歌集の注釈書。上野の国立国会図書館その他にも写本がある。それらについては本文「古今通について」を参照のこと。

13蘭洲先生詠歌大概古今序紀聞

一冊 写本（大阪府立図書館蔵本）
旧注を参照して詠歌大概・古今序を注釈したもの。巻末に
しるされた語には朱子学者らした見解がのべられてゐる。

14刪正日本書紀 四巻 未刊 写本

四 中井竹山

名は積善、字は子慶、通称善太、同関子・漢翁・雪翁・竹山などと号す。享保十七年生る。文化元年二月五日歿。寿七十五、八丁目寺町誓願寺に葬る。

15万葉仮音 未定稿不分巻（未見）

五 中井履軒

名は積徳、字は処叔、通称徳二、履軒幽人と号す。享保十九年生。文化十四年二月十五日歿。寿八十六、八丁目寺町誓願寺に葬る。

16 百首贅々 活版本 一冊 明治廿五年十一月 中井木菟

麻呂刊、博文館発行

百人一首に注釈を施したもの。これには所々に異説が示されてゐる。「春すぎて」の歌の注に、「香山ハ大山也大和河内ノ疆ナル葛城ニ上龍田金剛山ナト一帯ノ連山ノ総名ナリ甚ノ勝景ナレハニヤ香山ト名付ケラシ萬葉ニ同ク御製アリテ中ニ海原海鷗ノ句アリ証トスベシ大和ニテ茅渚海ヲ望コトハコノ一帯ノ山ヨリ外ニハナシ畝火耳無ナドノ小丘ニテカカル眺望ノ勝景アルベキヤ」とある。

17 履軒先生和文集 乾坤二冊 半紙本写本（懷徳堂文庫蔵）

乾、華胥国歌合・昔の旅

坤、華胥囈語・華胥国記・与竹里翁・世のたから・巴歌集序・ふきのことは・歌のすかた・夢路草枕・しのぶ摺・しからみ・くれなる・長き夜・ねのひ・歌のすかた（コレハ前ノ歌のすがたトハ内容異ナリ）かすめ歌・百首考（コレハ百首贅々ノ冒頭文ナリ）破腹巻記

18 離題伊勢物語 二卷（未見）

19 離題古今和歌集 二卷（未見）

七 加藤信成

幼名源吉、通称清右衛門又源四郎、右門（禹門とも）と称し、字は子原、季朝、休々亭などと号す。貞享四年十二月朔生、

寛延四年六月二十四日歿、寿六十五。

学を五井持軒、三宅萬年、三輪執斎に受け、歌学を烏丸光榮に、医を後藤良山に学び、儒医を以て身を立てた。加里竹里の父。

20 承露吟草

家集である。

八 加藤竹里

名は景範、通称小川屋喜太郎（のち友輔と改む）号は竹里又居貞斎 享保五年五月朔生、寛政八年十月十日歿、寿七十七。

21 加藤竹里書簡集 二帖（懷徳堂文庫蔵）

内容は有賀長収贈答書簡その他、文反古 貼交ぜ

22 藏山集

一冊 写本 安永四年手写 大形本

加藤景範撰 序並本文自筆 跋中井竹山自筆（住吉神社御文庫蔵）

全 板本 一冊 半紙本

安永四年十一月 景範編輯 浪華書肆 堀内庄兵衛。

住吉神社に奉納のため廿九人の歌人から歌を求め、春夏秋冬悉雑に部類したもの。

◎難藏山集 小沢芦庵著 藏山集を刊行したことに對して

芦庵は神に奉納した歌を出版して広めるといふことは売名的行為なりと非難し、藏山集の歌を適宜抜き出してそれにつき非難を加へたもの。それ故に上記板本から芦庵の歌は削つてある。

23 和歌みなれさは 一冊 半紙半截本

寛政四年七月刊行 浪華書舗 柏原屋佐兵衛、小川屋六蔵板。

和歌に用ひる単語を天文・歳時以下十八項目に分類して並べたもの。

24 国雅管窺

一冊 美濃袋綴板本

享和二年五月刊行 浪華書舗 柏原屋清右衛門、小川屋清右衛門蔵板。

有賀長収の序がある。初学者のために和歌の作法についてのべたもの。勿論和歌の本質についても述べてゐるが、特に景範の自説とみとむべきものはない。

25 和歌実践集

五冊 美濃袋綴板本

寛政七年七月刊行 浪華書肆 岩崎徳左衛門、加藤源蔵、同清右衛門蔵板。

勅撰集から実作の模範となる歌をえらび出してそれを春夏秋冬 恋 賀 哀傷 離別 羈旅 雑に部類し、さらに題によって分類して掲げたもの。

26 古今通補

(未見)

前記12古今通に施した補注。

27 源語解

(未見)

28 勢語通註

(未見)

29 万葉趨避

(未見)

30 みやびこと玉かつら一冊

31 国詞叢録

一冊

竹里の養嗣子敦善編纂にかかる竹里の和文集

32 秋霜親筆

一冊

右33国詞叢録に対して詠草としてやはり敦善により編輯されたもの

33 和歌虚詞考

二冊 半紙袋綴板本

寛政元孟春刊行 浪華書舗 柏原屋清右衛門他五名による板行。

内容は「虚詞といふは、たとへば、いとどしく、はへ（ふりはへ・うちはへの類）はた、さすが、中々、をのづからの類也 此一つの虚詞にさまざまの心のかはりあり 此書は和歌の虚詞をあつめ、証歌を引いて、委しく注釈を加へたる也和歌を学ぶもの肝要の書なり」とある本書の袋の案内によって大要を得てゐる。要するに和歌に用ひる副詞・接続詞・助詞・形容詞・接尾語などの「虚詞」を分類解説引例したものである。

34 新古今集旧注補遺

一冊 写本（九州大学蔵本）

同表題のもの二冊ありて、うちの一冊は無野美濃袋綴の草稿本。他の有野の方は清書本。清書本の方には草稿本の前半部しかない。草稿本は全二十巻の中から二百数十首の歌を選んでこれに注解を施したもの。

主として北村季吟の八代集抄の批判と自見の説述。旧派歌人としては旧注に捉はれてゐないところが良心的。季吟の注に対するその批判は全く儒教道德的立場。新説に乏しく創見も少く、難解歌は余り扱つてゐないので注釈史的にはさして重要なものとはいへないが旧注系統では異色あるも

の。

35 六吟百首和歌 一冊 写本(住吉神社庫藏本)

竹里の手写。寛政四年九月十九日。幸榮・転以・堯智・恭貞・惟直および竹里の六人が集って一夜に百首題を詠み、神前に納めたもの。

36 奉納月次和歌 四冊 写本(住吉神社神庫藏本)

竹里らの同志が集って寛政二年より同五年に至る月次の詠出歌を、年毎に浄書奉納したもの。その二年の巻が千里の手写である。

37 積翠集 一冊 写本(住吉神社神庫藏本)

妻屋秀貞の詠草。竹里の添削並写、跋がある。

38 和歌三題集 一冊 袖珍本 安永六年刊(大阪府立図書館藏)

故事まで含めて和歌に用ひる詞を分類して注したもの。

第一部和歌浜づと 目錄に、天象(天・日・月……) 歳時・方位・地儀・国部・居処・神社・仏寺・草・木・鳥・獸・昆虫以下八項。

例一 天象、天、すめるはそら ―の原 ―つ空 ―の戸。

第二部名所ついまつ 寛政四年の序・凡例につづいて 山・

嶺・谷・袖以下五三項目がある。

例一 山、いなり山 初午・梅・花 拾漣の水かべりてすまは稲荷山七日のはれるしと思はむ 附録 園・

氷室・隈・寫。

第三部美那礼棹 天文・歳時・方位以下十六項。巻尾に萬葉

仮名の分類表を掲ぐ。

39 補遺名所ついまつ 一冊 袖珍本 写本(大阪府立図書館藏)

序・奥書ともにない。全七十六枚。山・嶺・袖・坂・岡・路・関などの分類によつて各地の歌枕をあげ、例歌を引用してゐる。夫々の項には簡単な解説もつてゐる。

例一 原 檜原・松原・萩原・かや原など原の題ニかなはず

野に同じくうちひらきたる所を云。

山、いふき山 近江なり 伊吹の外山・さしも草・嶽・

——おろし——のみね——里 新古逢事はいつとい

ふきの嶺に生ふるさしも絶えぬ思なりけり

40 閑吟羈旅百首 一冊 大形本 写本(大阪府立図書館藏)

植村雪翁、景範の斧鉞を得た旅の歌百首を集めたもの。雪翁自序あり。四季・雑に部類す。巻末「旅の歌百首よみて

添削をこひける詠草のおくに書つけ侍る」とあつて、景範・

維足・通央・定昌などの歌がある。最後に明和三年の跋を

附す。(四中井竹山の項に入れるべきもの)

41 芳埜日記 一冊 半紙版袋綴 写本(大阪府立図書館藏)

扉に、加藤千里師 芳埜日記 とあり、奥に、「文化元甲子

秋、尾崎氏社中本之内拔萃写之」と記す。裏表紙内側に、

「沢辺氏」とある。慈延禪師にさそはれ、景範・長収など歌

このむ人々吉野に同行した時の紀行で、所々に頭注を附し

てゐる。

例—本文で「水駅」とある上に、「水むまや食物ナシニ湯茶
ハカリアリ茶店」

本文の終ったあとに景範の和歌三首がある。

42 加藤千里文集 一冊 半紙判袋綴 写本（大阪府立図書
館蔵）

上巻には四国讃岐から淡路島にかけての旅の文「西遊紀行」
が入ってゐる。

中巻「早のことば」「伊勢路の記」（明和八年、一七七二）
「但馬日記」（明和九年）「岸上野のことは」「馬山記」（安
永二年・一七七三）「五美堂記」（安永三年）……「蔵山集序」
など十五篇の文があり、「岸上野のことは」の末尾に、「竹
里原稿には刪るべしと書り、出して一篇とし、ひそかに蔵
す 牛尾介」とある。

下巻「綱濤録」（天明元年、一七八九）長収の歌も入って
ゐる。その他二篇。

この文集は明和年間から寛政の初年にかけて約二十年間の
文章を集めたもの。編者は前記牛尾介なる人であらうか。

43 和歌浜のまさご 一冊 半紙判袋綴 刊本（大阪府立図書
館蔵）

類歌集である。巻初に「浜のまさご恋上目録」とあり、寄
天恋・寄日・寄月・寄星など寄物的部類多致。板元は書林
中野六右衛門。但し刊行年月の部分は裏表紙にのり附けし
てあるために分らない。

44 かはしま物語 一冊 半紙判袋綴 刊本（大阪府立図書

館蔵）

中井履軒の漢文序、中井竹山の漢文跋、附録に「きみのこ
とば」があり、本文の奥に「明和庚寅七之冬 加藤景範撰」
とある。ある孝子を扱った和文の実録小説。

同（孝行物語） 一冊 写本（東京大学蔵本）

45 何世語 一冊 半紙袋綴 自筆稿本（大阪府立図
書館蔵）

明和元年（一七六四）の中井竹山漢文序があり、奥に、
此物語たか作れるやしらすさいところ吉野に遊歴せし時同
宿せし翁のみせ侍しを写しとり侍る也つくつくと見侍るに
古き物ともしらすかの翁好事のものとおほえしかもしみつ
から書るにやと思はれ侍る。
とある。一種の擬古物語である。

46 竹葉露 五巻 卷子本自筆草稿（大阪府立図書館蔵）

主として竹里の詠草をその孫が類聚したもの。

47 和歌浜づと 48 松の下露 49 間思隨筆

右47—49の三部は大阪市立大学図書館の森文庫旧蔵目録中に
あるが、書物は同図書館に入っていないといふ。